

ターや教材面での日本の協力を望んでいた。大学生では、学位の取得と高等教育ができる教育環境や施設への要求が強かった。

このようにサモア側では基礎学力、教師とカリキュラムなどの質的改善が必要であり、特に理数科教育の振興が大きな課題である。そのために海外からの協力が求められ、特にカウンターパートをうまく利用しなければならない。一方日本側は、

サモアの教育の現状に即した教育援助プロジェクトをつくり、ボランティアたちの語学力をさらに向上させるという良質の援助が必要である。特に日本で進んでいる理数科教育の分野で積極的にかつ長期的な視野に立って援助計画を作成するべきである。さらに計画を策定して、協力し合うのが大切であろう。

高知県の自然災害について

百田 和加

本研究では、高知県でどのような種類の自然災害があり、どのような被害がどの程度発生しているのか、正確に認識することを試みた。

資料には、高知県消防交通安全課がまとめた1991～2000年の災害記録を使用した。それから『自然災害一覧表』を再編集し、さらに被害別に分類した結果、全体の自然災害件数のうち豪雨が約53%、台風及び豪雨が約28%、その他が約9%だった。また被害別分類では、豪雨による被害は、人、建物、農林業水産施設、畜産、商工に特徴的に発生していた。台風及び豪雨による被害では、罹災者数、公共土木施設、公共文教施設、水産被

害、その他の被害が特徴的だった。総じていえば、高知県の自然災害において雨が関わる水害が代表的であることがわかった。

また、警報・注意報、災害対策本部についても分類をした。警報・注意報では、東部・中部で大雨・洪水警報の発令が多く、西部で大雨・洪水注意報が発令される回数が多いことがわかった。災害対策本部の設置回数、市町村数を見ると、ともに台風及び豪雨時に多かった。

「災害記録」は、作成基準や方法が未だ確立されていない。今後の防災対策のために急ぐべきであろう。

北アルプスで増加する中高年女性とその行動

森脇 理恵

1980年代後半から中高年登山者が増加し、百名山の流行ともなって、中高年の登山は爆発的なブームとなった。1990年代後半には新たに中高年女性登山者が増加した。本研究では、最も人気のある北アルプスにおいて、彼女らの意識と行動を分析し、増加の原因について考察した。北アルプスの山小屋7軒でアンケート調査を実施し(回答数473)、山小屋関係者を含めた聞き取り調査を実施した。

結果によると、北アルプスにおいて、中高年女性登山者は男性と比べて登山歴が短い傾向がある。中高年になって時間に余裕ができ、健康を気遣うようになり、登山への関心を高めていったこと、また、中高年登山ブームによって山小屋、交通手段、山の装備などがよくなったことが中高年女性

登山者の増えた原因である。

ここ数年のうちに登山を始めた中高年女性は、山岳会に入会するなど積極的に仲間を広げており、中高年男性よりも年間山行日数が長い。そのとき、単独ではなく、夫婦・家族などのほか女性同士のグループで行動をしている。

中高年女性は、アプローチが短く、危険箇所が少ない山を好む。なかでも初心者には立山・乗鞍岳のように手軽にいける山や、白馬岳・常念岳のように、アプローチが短く危険箇所がなくお花畑などの自然を楽しめる山に登っている。剣岳・槍ヶ岳・穂高岳のように一般的に人気があっても、岩場などが多く、難易度が高い山にはあまり登っていない。

また、黒部五郎岳・鷲羽岳・水晶岳・雲の平な

ど北アルプスの最奥部には、中高年女性登山者のうちでも多くはベテランが、山岳会や友人同士のパーティーで登っている。中高年女性は自分の実力に合った山を選んで登っているといえよう。

中高年女性は中高年男性に比べて長めの行程をとる。中高年男性は頂上へなるべく短時間に登って下りてくるコースをとる傾向があるが、中高年女性は1泊多く宿泊したり、時間はかかっても歩

きやすく、安全なルートを選ぶ。中高年女性登山者は縦走して一度に多くの山に登るコースを選んでいる。時間に余裕があるためである。

さらに、高山植物が中高年女性の登山の大きな目的の一つである。途中にお花畑や湿地帯などが多い山やコースを選択し、時間をかけて山の自然を楽しむのが中高年女性の特徴といえる。

ジャズの里づくり ——青森県南郷村の村おこし——

山口 寿美子

青森県南郷村は、人口6688人の自然豊かな純農村である。1970年に過疎地域に指定されて以来人口は減少傾向にあるが、近年「ジャズとそばの里づくり」という村おこしプロジェクトが成功して高い評価を受けている。

1990年に自治体主導で「南郷ジャズフェスティバル」が開催され、2002年で第13回を迎えた。毎年国内外から有名な一流プロミュージシャンが5団体も出演することで人気を博し、全国から観客が訪れるようになった。聴衆数は最高5800人に達し、東北で最大・最長開催のジャズフェスティバルにまで成長した功績は大きい。過去に「'95あおもり活性化大賞」など5つの賞に輝いている。2000年には、ライブやBGMでいつでもジャズが体感できる施設「ジャズの館」がオープンした。

ジャズフェスティバルの運営には、約70人の若者ボランティア(青森大学社会学部の学生も含む)と役場職員有志があたる。売店の屋台には婦人会、農産加工グループ、商工会、ブルーベリー生産組合などの100人以上のスタッフが、交通防犯指導には交通安全協会の交通指導隊、防犯協会の約40人があっている。彼らのほとんどは南郷村民である。

ジャズフェスティバルによって他市町村との交流人口が増大し、南郷村の知名度は飛躍的に上がり、「文化的な村」というイメージが定着しつつある。定住促進団地「グリーンタウン」の分譲が好評

なこともあり、近年は定住人口の増加も見られる。ジャズがきっかけでU・J・Iターンした人も少数いる。

村民意識の上でも、自分たちの村を誇りに思うようになってきた。また、ジャズフェスティバル当日の、売店の売れ行きがよいので、野菜や果物、ブルーベリー・そば・モロヘイヤなどの特産品を使用した新製品などを消費者に直接販売するための直売所建設の要望が出され、「ヤッサイなんごう」がオープンした。「ジャズ丼」や「ジャズ菜」など、ジャズにちなんだ新製品も村民の手で次々と開発された。

一方、多くの問題点も顕在化してきた。悪天候の影響で、ここ数年の聴衆数は減少している。類似イベントの台頭と競合、不景気、マンネリ化などの影響も指摘されている。また、若者ボランティアや屋台出店者の減少も大きな問題である。さらに、開催の第1目的が、村外へのPRにあるので、イベントが村民のためになっているのか、ジャズの里と呼べるほど村民にジャズが根付いているのか疑問が残る。

今こそ、行政・村民・専門家が一体となって、もう一度“ジャズの里づくり”の方向性や改善策を検討するべきではないだろうか。特に村民のアイデアを採用したり、村民の意見に耳を傾けることは重要である。